

2021年8月1日～2日に函館水産試験場試験調査船「金星丸」で噴火湾環境調査を実施しました。噴火湾周辺海域の水温・塩分・溶存酸素の観測結果をお知らせします。

(函館水産試験場のHPからもご覧頂けます <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>)

【水温の鉛直分布】

噴火湾内の表層（深度5m）の水温は21～23℃台で、昨年(一昨年)と比較して1～3℃（2～5℃）高くなっています。一方深度50mの水温は4～9℃台で、一部を除き昨年よりも0～3℃低くなっています。また、噴火湾外の深度5mの水温は19～21℃台で、こちらも昨年や一昨年に比べ高温になっています。

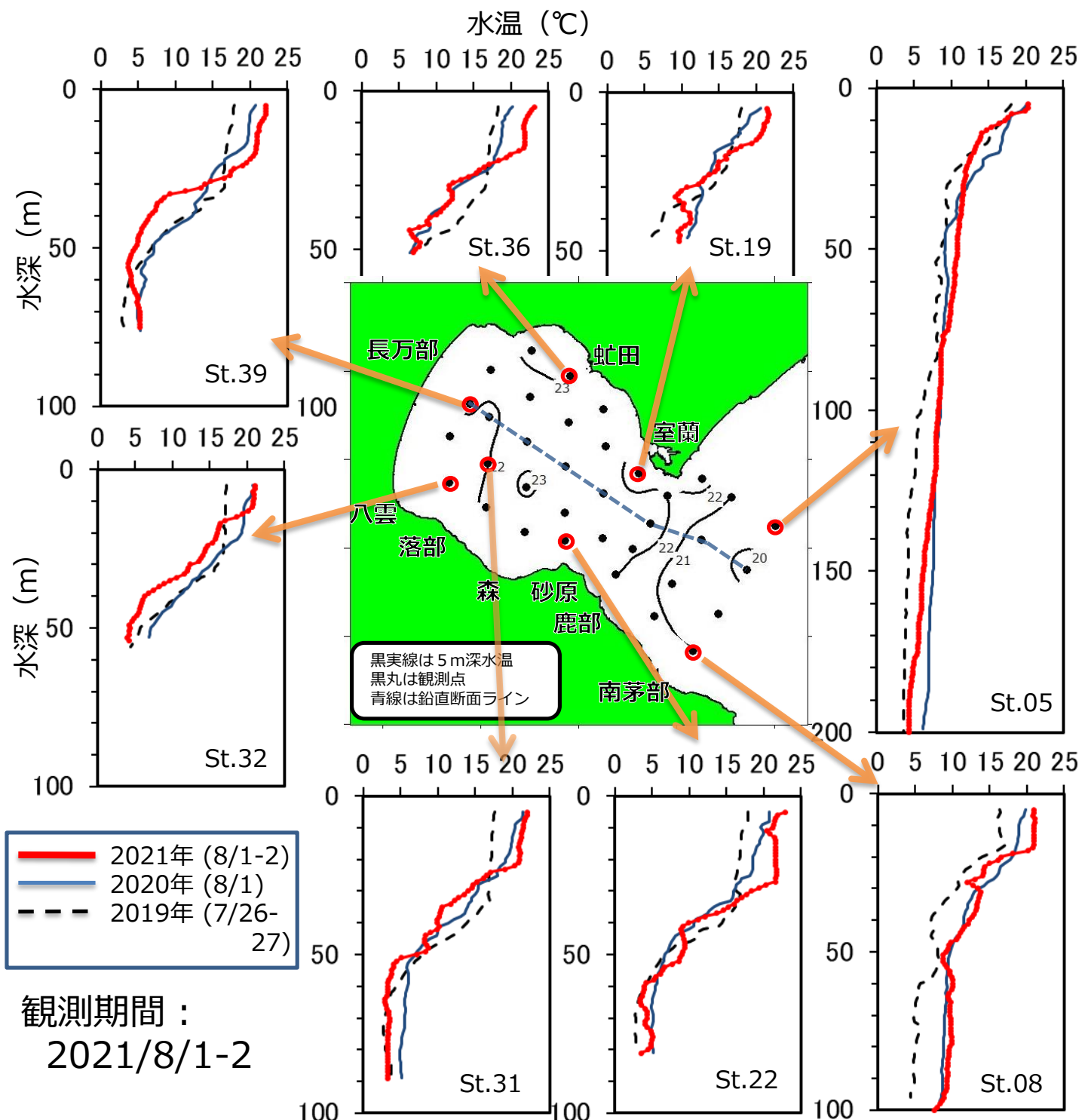


図1 噴火湾各地先の水温の鉛直分布

【水温、塩分の鉛直断面分布…7月と8月の比較】

噴火湾内の8月の深度20m以浅の水温は21℃以上で、7月よりも3℃以上昇温しました。深度30～40mには水温が急激に変化する「水温躍層」が見られ、この躍層の下
の深度50m以深は概ね8℃以下で、7月よりも約3℃昇温しました。
津軽暖流水(水温6℃以上、塩分33.6以上)は、7月よりも噴火湾内に近づいて先端は湾口部に達していますが、湾内にはまだ流入していません。

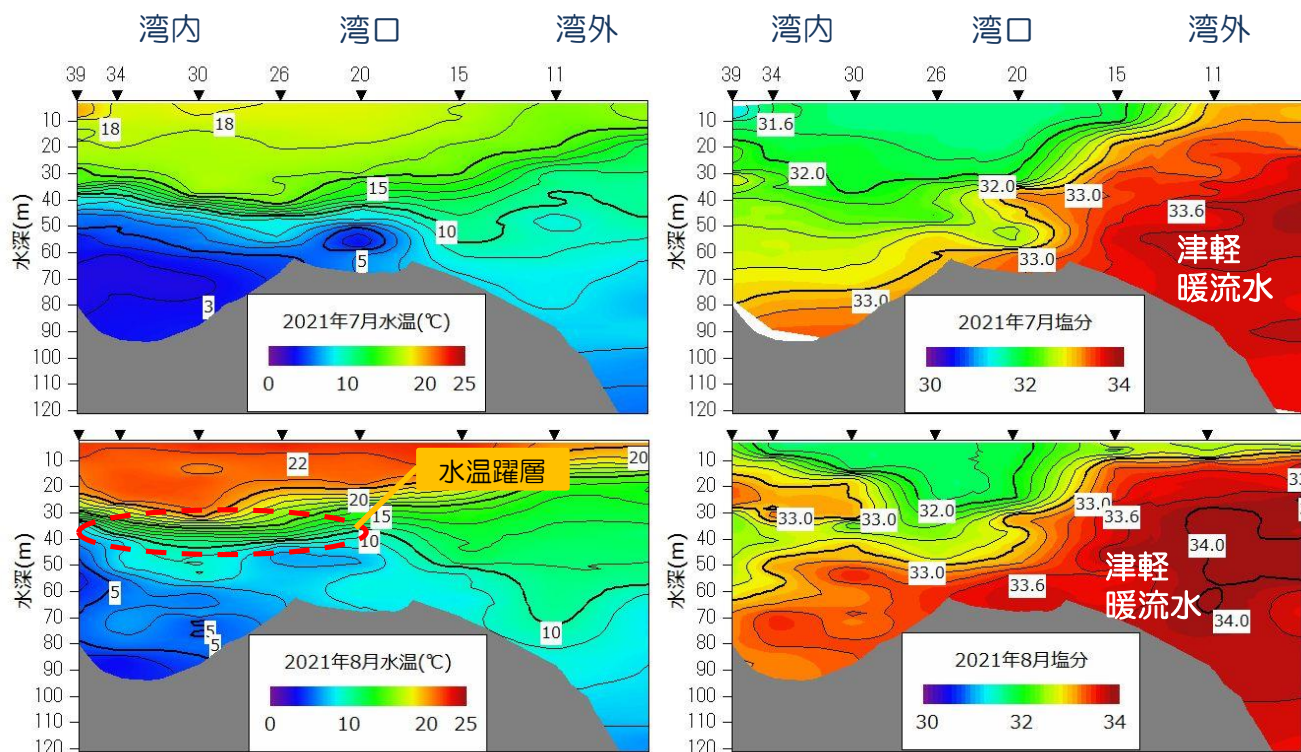


図2 水温・塩分の鉛直断面図（上段：7月，下段：8月）
鉛直断面の位置は図1の青破線を参照 上部の▼は観測点

【噴火湾の海底直上における溶存酸素量の月変化】

一般的に海底付近では有機物が分解されるときに酸素が消費されます。噴火湾の底層でも同様のことが起こりますが、噴火湾の海底地形はお椀状になっているため、海水の交換が起こりにくい深層部では特に春から夏にかけて溶存酸素量が減少し続けます。今年も噴火湾の深みに位置するSt31の海底直上の溶存酸素量は6月以降減少し続け、8月には1.3ml/Lまで低下して貧酸素水（3ml/L以下）となっていました。しかし、今後酸素濃度の高い津軽暖流水が底層に流入すれば、貧酸素水は解消すると考えられます。

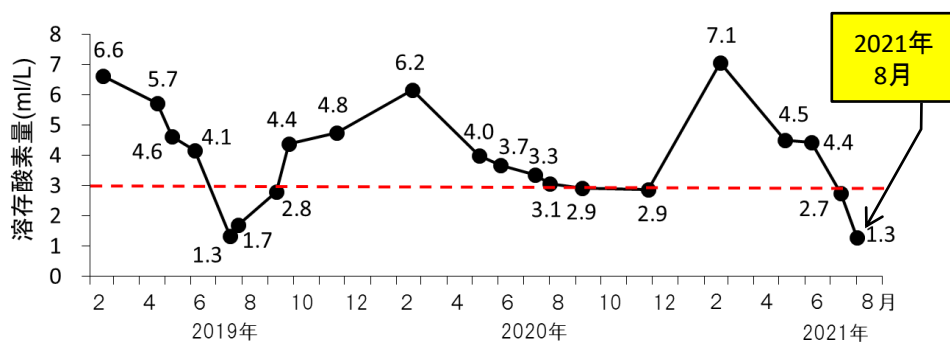


図3 海底直上における溶存酸素量の月変化（St31）
St31の位置は右図を参照
赤破線は、貧酸素水の基準値の3ml/Lを示す